

開館50周年記念特別展 「浅井忠、あちこちに行くーむすばれる人、つながる時代ー」 令和6年10月30日（水）～令和7年1月19日（日）

県立美術館

近代洋画の先駆者として知られ、日本画や工芸、図案など多様な分野で活躍した浅井忠（1856-1907）。昭和49（1974）年の開館以来、千葉県にゆかりのある浅井の作品収集及び調査研究に努めてきた当館は、約200点の作品と約1,500件の関連資料という日本有数の浅井忠コレクションを有している。今年、当館が開館から50周年を迎えることを記念して、これらの作品・資料とその研究成果を紹介し浅井の人物像に迫る展覧会を開催する。

1 浅井忠（あさいちゅう）とは

安政3（1856）年、江戸の佐倉藩邸に生まれ、7歳で佐倉・将門町（現・佐倉市）に移り黒沼槐山に日本画の手ほどきを受けた。17歳で上京して日本初の官立美術学校である工部美術学校でフォンタネージに本格的な西洋画を学び、その同級生を中心メンバーとして日本最初の本格的洋風美術団体「明治美術会」を組織した。

東京美術学校教授就任後、西洋画研究のため2年間渡仏。明るい色彩で季節感豊かな作品を制作した。

帰国後は京都に移住し、京都高等工芸学校の図案科で教鞭を執った。聖護院洋画研究所、関西美術院を設立し、安井曾太郎や梅原龍三郎を育てるなど後進の育成に積極的に関わり組むと共に、陶芸、漆芸図案制作に力を注いだ。京都の地で多彩な活動を繰り広げたが明治40（1907）年、病に倒れてその生涯を閉じる。門下からはその後の日本洋画壇を牽引する人材が数多く輩出されるなど、まさに人と時代の架け橋となった人物である。

2 展示と関連イベント

開館50周年を記念し企画された本展では、当館が所蔵する4つの日記ー「筑波日記」、「従軍日記」、「巴里日記」、「フォンテーヌブロー日記」ーを軸に、当館所蔵の浅井作品を一挙公開、他館からも作品を借用してご紹介する。さらに、工部美術学校在学時の練習用デッサンやフランス留学時代の句集『寒月・水仙』、浅井が様々な人と交換していた絵葉書や書簡といった貴重資料を作品とともに展示することで、その多岐にわたる活動に隠された人物像に迫っていく。



浅井忠《ナポリ》1902年、千葉県立美術館蔵

会期中には、本展覧会の図録執筆者による連続講演会を開催するほか、展覧会を家族で楽しむための館長によるファミリーツアーや、浅井が手掛けた図画教科書を実際に体験できるワークショップを実施する。さらに、「浅井忠日記資料デジタルアーカイブ」として、浅井の日記資料を地図と関連付け、見るだけで楽しめるアーカイブも公開している。

この秋、浅井忠の知られざる姿に出会える展覧会「浅井忠、あちこちに行く」にぜひお越しいただきたい。

開館30周年記念 令和6年度企画展 「見る ー生き物の目・機械の目ー」 令和6年10月12日（土）～12月1日（日）

県立現代産業科学館

生物の視覚システムは、膨大な情報を取捨選択し、補完しながら、見える世界を認識する非常に優れたシステムである。私たちはその「見る」ということを、ほとんど意識することなく行っている。

機械の視覚システムも驚くべきスピードで進化している。カメラや情報を処理する技術の向上、さらにはAIが登場したことにより、機械がまるで人のように情報を取捨選択し、補完された世界を見ることができる。生物と機械が協働して見るその先の未来は、果たしてどのような世界なのだろうか。

今回の現代産業科学館の企画展では様々な「見る」を紹介する。人の見え方や生き物の見え方のほか、電子顕微鏡・高感度カメラなど、人の目では見ることのできない機械の視覚技術にも焦点をあてる。また、人の目と機械・AIが共に認識する新たな見え方を紹介する。

本展で様々な「見る」に触れることで、新たな視点で世界を見直す機会を提供したい。

1 「見る」とは

脳は、立体物を見る際に、奥行きを自動的に補完し、推測して認識している。人はこれを意識することなく行っているため、普段の生活では実感することができない。

本展では、目の前にある物体と、鏡に映っている物体の見え方が違うという立体錯視の世界を体感できる展示により、普段何気なく行っている「見る」という行動を改めて意識してもらう。



作品「巣に帰る」実際の立体は手前のハチのような形だが、鏡に映った姿はハチの巣のように見える
協力：明治大学研究特別教授 杉原 厚吉

2 生き物の「見る」

生き物の優れた「見る」能力を紹介する。人間の「見る」能力では、伝統工芸品を制作する職人の見る技術、見えにくい人の「見る」世界について触れる。また、海の生き物などが見ている世界を体験するコーナーでは、あさりの巨大断面図などもあわせて展示し、「見る」に関する体の仕組みについても紹介する。

3 機械の「見る」

科学の発展によって進歩したミクロの世界を探究する技術を紹介する。産業や研究の現場で使われている顕微鏡や高速度カメラなどを展示し、機械の視覚システムによる見え方の違いなどを体験してもらう。

4 未来の「見る」

災害救助の現場で人・機械・AIが視覚を共有するシステムや、3Dホログラムによって自分の書いた絵が浮き出るシステムなど、最先端の技術を展示し、未来の「見え方」の可能性を紹介する。